
君といっしょに。

金富一良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君といっしょに。

【Nコード】

N1372I

【作者名】

金富一良

【あらすじ】

恋をしても、いいですか？

輝かしい未来が、見える。
(前書き)

なんかグダグダになったら

すみません

でもグダグダになる

恐れ大です
↑

拙いですが

宜しく御願いたします。

輝かしい未来が、見える。

・
・
・

聞こえてくる。

こんな俺を

迎え入れてくれる声が。

・
・
・

見える。

俺をとりまく

6人の少女が。

・
・
・

彼女と笑っていた

俺自身が。。。

「ふわぁあつ、もう朝かよ」

「ここが、新しく編入する学校か」

俺の名前は神部^{カンベサトル}覚。

高2の2学期という

中途半端な時期に

^{アカシキコウコウ}暁高校に

編入することになった。

覚「さて、新しい学校に行ってくるかな」

俺はそう言って

家を出た。

歩くこと十数分。

学校についた。

俺は校内に入ることになった。

学校内は前の学校より

はるかに広い。

道に迷いそうだな。

覚「つと・・・もう時間だ。」

俺は廊下を走った。

ドンッ？

誰かとぶつかってしまった。

？「ふにゅー、いたたたた・・・」

覚（女の子らしいな）

覚「ごっ、ごめん、大丈夫・・・？」

？「うん、平気だよー。僕の方こそごめんねー、大丈夫？」

覚「ああ、俺は心配いらない」

僕？まさか男じゃないよな？

ふと顔をあげてみると・・・

うん、女の子だ。

なかなか可愛いじゃないか。

くりくりとした目。

ふにゅーとした口。

ポニーテールのボクっ子。

マンガのキャラクターだよ。

思わずじろじろと

見てしまう。

？「ん？どーしたの？」

覚「あつ、いや、ごめん／＼」

？「あー、さては見惚れてたな」

覚「・・・わりい／＼」

？「君かわいーね／＼なんて名前？」

うわお。

こやつ、何物だ。

初対面の人間を

君かわいーねとか

普通いうか？

まあとりあえず

教えておくか。

そして教えてもらおうか。

？「ふんふん、覚君って言うんだ。鳥頭だけ覚えておくよ」

どういう意味なんだか。

覚「んで、君の名前は？」

？「あつ、言つてなかったっけ？」

・・・なんだ。

ただのアホなんだな。

？「僕は浅沼紫穂。^{アサヌマシホ} 2Aだよっ
隣のクラスの子か。」

覚「なるほど、浅沼さんね」

紫穂「むー、紫穂でいいのっ!」
なんと。

紫穂「その代わり、僕も君のこと、覚って呼ばせて」

まあ断る理由はないから
いいんだが。

覚「喜んで」

紫穂「わーい」ありがとっ
ドキッ

そろそろ時間ギリギリだな。

覚「急ごう、HR始まるんじゃない?」

紫穂「そだね」

紫穂「あつ、これからよろしくね」

覚「お、おう／＼／」

さあ、教室だ。

前で先生が待っていた。
打ち合わせ通り、中に入り
自己紹介をした。

あの頃より、元気に。

皆は暖かく迎え入れてくれた。
良かった。

先生「じゃあ、神部君の席は沖山さんの隣ね」

ザワツ・・・

教室内、特に男子が
ざわつき始めた。

スツ？

沖山？「こっつ、こっつよ」

・・・なんなんだ、この輝かしいオーラを放つ少女は。
この学校のヒロインだろうか。

沖山？「オキヤマユナ沖山柚菜。よろしくね^^」

太陽より眩しい笑顔。

これが、美人というものなんだろう。
騒つくのも無理はないな。

クラスの空気も

なんとなくつかんだ。

まあ元気のあるクラスだな。

それだけがとりえだったら
困るんだが。

そしてフレンドリー。

すぐに友達も出来た。

・・・？

俺は目を細めた。

輪に入らない、一人の少女を。

なんだかんだで
帰りの時間。

あの少女が一人でベランダから
空を見ていた。

声をかけてみることに。

覚「おい」
？「何か？」

スラッとして、ロングの黒髪が風にたなびく。
しかし、その美貌は
そんじょそこらの女には
負けない美しさを持っている。

覚「何してるの？もう帰る時間だよ」

？「ああ、そうなの？」

さらっと流す。

空気感はタダ者じゃない。

覚「じゃ、俺は先に帰るよ」
？「どうぞ」

なんなんだ・・・。

まあとりあえず帰ることにした。

下校中。

覚「まあまあいい学校っぽいな」
そう言いながら帰ってる。。。

?「あれ?覚?」

この声は、どこかで・・・。

覚「真梨姉、、、なのか?」

真梨姉?「やつぱ覚じゃ〜ん!!!!どうしたのさ?」

この人は田中真梨。
タナカマリ

小さい頃、ずっと一緒に遊んでいたんだ。

真梨姉と呼んでいるが

実際に血はつながっていない。

しかし、ずいぶん時はたったもんだ。

今やめちゃくちや美人じゃないか。

あんなにわんぱくだったのに。

覚「んで、真梨姉はなんているの・・・ってこの制服!?!」

真梨「えっ、覚もこの制服ってことは、、」

同じ学校の生徒ってことだ。

真梨「あー、今日転校してくる生徒って覚のことなんだー」
覚「ま、そういう事」

真梨「しかし、随分大人びたねー、格好よくなってきた」
覚「真梨姉も綺麗になってんじゃないよ」

真梨「や、やだなあ／＼／＼なんか照れちゃうね／＼」
ドキッ

真梨「素直さは全然変わんないんだね」
そうだったな。

・・・でも、中学から今までは
相当酷かったけどな。

引越した原因の一つでもある。

そしてなんだかんだ

話しているうちに家についた。

真梨姉の家は

意外と近くにあることも

わかった。

覚「ふう、疲れた、」

ただいまも言う必要はない。

一人暮らしだから。

夜が更けてきた。

寝る準備をする事に。

あの黒髪の女の子、

何者なんだろう。

考えるうちに
寝てしまっていた。。

9 / 2 (火) 朝『昼』日々の始まり1』

【9 / 2 (火)】

ジリリリリ！

目覚しが高く鳴り響く。

カチッ

覚「朝か・・・」

そう言えば今日から

学校で授業が始まるんだっとな。

学校の準備をしないとな。

ん？ なになに・・・

文化祭準備？

そういえば文化祭が

近いと担任から

聞いたんだが・・・

10月6日？

なんと。あと1ヶ月ちょいしかないじゃないか。

協力出来ることがあるなら

出来る限り頑張ってみよう。

つと。

トーストが焼けたようだ。

俺は朝ご飯を食べはじめた。

金はどうしているかって？
保険金だよ。

朝食を食べ終えた。
覚「さて、いくか」
靴を履き、玄関を開けた。すると、

真梨「覚」

お出迎えですか？

真梨「小さい頃、朝寝坊がひどかったから起こしに来てあげたの」
そういえばそうだったなあ。

小さい頃はそれで
よく怒られていたんだったな。

覚「ありがと真梨姉。でもおかげさまでこの通りに治ったよ」

真梨「なら良かったわ」

真梨「じゃあ、一緒に学校行きましょ」

まさかのシチュエーション。

いや、最初から

ありがちなパターンの

連続なんだけどき。

ここまでベタだとは。

作者（うるさい、それしか脳がなくて悪かったな）

覚（作者が小説内に出てくんなよ）

作者（失礼）

まあとりあえず

若干ときめきながら

学校に行くことにした。

なんたつて

こんな美人と

一緒に学校通学

できるんだもの。

一般男子から見たら

どんだけ羨ましいか。

そして学校に着いた。

真梨「じゃあ、私たちの教室は1階だから」

ちなみにこの学校の

校舎は3階建てで

真梨姉は3年だから1階

俺達2年は2階、1年は3階と

若いほど段を

上らなければならない。

なんとも意地悪い階段だな。

真梨「あたしはA組にいるから、困った時、暇な時はいつでも来なさいよ^^」

ドキッ

笑顔で手を振る

彼女にときめいた。

覚（いかん、自分！ときめいたら負けなんだ！昨日から何回か不意にときめいてるけど、そうそうときめいてなるものか！それに・・・）

これ以上は控えところ。

暗くなりそうだな。

俺は教室へと向かった。
ガラガラッ

俺は教室のドアを開けた。

誰もいない。
時計を見る。

7：48

朝のホームルームは
8：15から。

皆朝は弱いんだろうか。

俺は席につく。

ガラガラッ

ドアが開く。

柚菜「あっ、おはよう覚君」

ヒロイン登場。

覚「おっ、おはよ」

柚菜「随分早いだね」

覚「ああ、早寝早起きを心がけた結果こうなった感じ」

柚菜「クスッ、そうなんだ^^」

ドキッ

またときめきやがったよ

この心は。

覚「てか皆随分遅いね」

柚菜「このクラスは特にね・・・私がいつも一番に来て色々やってるんだ」

覚「色々って？」

柚菜「あっ、そうだ？覚君、頼みがあるんだけど・・・」

覚「？」

柚菜「色々とお手伝いしてくれない？」

これも何かの縁だろう。

場繋ぎのためにも

お手伝いしよう。

覚「いいよ、1人じゃなんか大変そうな感じするし」

柚菜「ホント！？ありがとっ^^」

眩しい笑顔をどうも。
そんなこんなで俺は
沖山さんのお手伝いを
する事になった。

覚「何すればいいの、沖山さん?。」

柚菜「あつ、柚菜でいいよ覚君」

覚「じゃあ、、柚菜さん、何すればいいの?。」

柚菜「えつとねー、、、、」

人間はこんなにも
フレンドリーに
なれるものなんだ。

そしてお手伝いが終了。

まあ黒板・黒板消しを

綺麗にしたり

机を整頓したり

換気したりということなんだが

毎日やってるとなると

少し尊敬してしまう。

覚「すごいや柚菜さん、いつもこつこついう事やってるんだ」
柚菜「偉くなんかないよっ？」

私の義務・・・だよ・・・」

私の義務？

その時、僕は
彼女の笑顔の裏を
知らなかった・・・

徐々に生徒も登校してきた。

キンコーンカーンコーン

担任「はい席ついて〜HR始めるよ〜」

ダッダッダッ

???「ち・こ・く〜〜〜!」

!?

声の主はどうやら

A組らしい。

扉で遮られていたから
よくは見えなかったが
黒と茶色のマーブルの
ロングストレートの髪型に
眼鏡をかけていた・・・と
思われる。

柚菜「鮎ちゃんまた遅刻かあ。」

鮎ちゃんと言っらしいな。

覚えておこう。

ホームルームも終わり

しばし休憩時間。

次の時間はクラス移動だ。

習熟度別にクラスが別れる。

俺はどうやら

一番上のクラスらしい。

ガラガラッ

クラスのドアを開けた。

すると・・・

紫穂「あつ、覚〜！」

覚「おつ、自称鳥頭の紫穂」

紫穂「んーっ、鳥頭は余計！」

自分で一番最初に

言ったろうが！

まあいいか。

クラスを見渡すと
柚菜も鮎という子もいた。
そして、あの少女も。

俺の席はあの少女の後ろ。

授業始まる寸前。。。

鮎「ごめん、ちょっと物とらせて〜」
え？

鮎「ここ私の席だから」

あつ、そうか。

鮎はA組だもんな。

（ちなみにここはA組である）

鮎「君、噂の転校生だよね？」

えっ、、、噂！？

もう広まってんのか・・・？

鮎「私は中本鮎。よろしくね」

覚「お、おう、よろしくな！」

よかった、ばれていないようだ。

さて、授業だな。

全然余裕♪

分かんない奴
いんのか的な。皆絶対頭良さそう。

・・・紫穂は違っけどな。
いつ落ちるか
わからんがな。紫穂「うえーん？」

まあなんだかんだで
4時間目が終わったわけだ。
そして昼飯の時間。

屋上に行き飯を食べることに。

屋上は自由解放らしい。
まあ誰も行く人は
いないらしいけど。
そして屋上の扉を開ける。

目の前の柵の向こう側に

あの女の子がいた。

覚「何を・・・しているの!？」

?「何って、外を眺めてるのよ。分からないの?」

覚「いや、わかるけど・・・!」

一歩間違えば転落してしまう。

覚「あ、危ないって!今すぐ戻ってきなよ!」

?「ふふっ、、面白い人ね」

いや、普通だから!

彼女は柵を軽やかに登り

こっち側に来た。

?「あなた、転校生よね?」

覚「あ、ああ」

?「・・・西沢檸檬。よろしく」

そういうと彼女は

足早に去っていった。

覚「な、なんだったんだ、、」

西沢さん・・・か。

覚えておこうつと。

あ。

飯食ってないや。

まあいい、時間があるから
今食べようっと。。。

俺は急いで飯を食った。
んで教室に戻った。

5・6時間目は体育。
なぜか水泳である。

体育は得意だから
別にいいんだがな。

そして帰りの会も終わり
帰ろうとしたところ・・・

クイツ

誰かに服をつかまれた。

紫穂だった。

覚「お、紫穂か。どした？」

紫穂「部活入ってないの？」

覚「ああ、うん、まあな」

紫穂「なんなら、、、」

暁部入らないっ？」

あ、暁部って、、

なんぞ！？

さあ、これが

大変な幕開けになるとは
予測できなかった・・・

9 / 2 (火) 夕方〜夜『日々の始まり2』

とりあえず暇だし

暁部に行ってみることに。

覚「ここが、、暁部の本店か？」

紫穂「そうだよっ」

Language Listening Room。

なんか英語の授業に

使う教室なんだろう。

通称LL教室。

ガチャ

覚「お邪魔します、、って！？ 柚菜さん、中本さん、真梨姉！？」

女子「覚（君）！？」「」

紫穂「あれ、皆知ってたの？」

そりゃ、特に柚菜さんは

同じクラスだし。

覚「さて、この部の活動、その他計画等を説明してもらおうか」
真梨「特になし！私が部長！後は自由！以上！」
ズコー

覚「なんだこの部活！？」
柚菜「まあ自由気ままに色々と楽しむ部活よ」
鮎「色々と・・・ね」
中本さんは何を考えているんだろうか？
問うてみたい。

紫穂「どうどうよ？」
覚「ま、入る部活もないから入るよ」

こうして俺は
暁部という
謎の部活に入ってしまった、、
まあすることはないから
別にいい。
ちよつと、、謎めいて
面白そうだからな。

覚「さて、今日は何をするんだ？」

真梨「とりあえず、なんかしましよう」

鮎「じゃあ町歩いてみない？新しいゲームセンター近くに出来たらしいからそこ行こうよ」

紫穂「さんせーい！」

柚菜「私も行ってみたい？」

ゲーセンかよw

でも考えてみれば

ゲーセンなんて

悪い思い出しかないな、

覚「・・・」ボーツ

紫穂「覚、どうしたの？」

覚「あつ、わりいわりい。まあ行こうぜ！」

紫穂「・・・？」

とにもかくにも。

ゲームセンターに行くことになった。

・・・。

覚「てか、男子って俺1人なんだな」

女子「」「」「うん」「」

満場一致の解答をどうも。

金とかどうなるんだか。

そうこう考えているうちに
ゲームセンターに到着。

ゲームセンターというよりは
ラウ。ドワンにも見えるな。
ボーリングあるし。

真梨「ボーリング大会にしましょうか」

ボーリング大会・・・ハッ

俺は思い出した。

小さい頃、ボーリングで
真梨姉と競い合って
いつも負けていたことを。

でも今は違う。

最強になった俺を
とくと見せてやる。

カコーン！

真梨「いえーい！またストライクねっ！」

・・・嘘だろ？皆普通に

ストライクとかスペアとか

バンバン出すんですが。

何なのこの子達。

んでもって最下位だった俺は
ボーリング代全額負担ってことに。
これもかかってたから
負けたくなかったのに・・・

ちなみに

覚	1	6	9
紫穂	2	0	1
柚菜	1	9	6
鮎	2	1	0
真梨	2	5	8

の結果だった。

真梨姉どんだけ上手いんだよ。

もうレベルが

プロボウラーだろ。

まあその後は

ガンシューティングやったり

クレインゲームやったり

なぜかプリクラをとったりした。

女4男1のプリクラって

なんなんだろう、、

俺はプリクラを

携帯の裏に貼った。

思い出としてな。

そして皆で帰宅途中、、

紫穂「ねえねえ覚っ」

覚「ん？どうした？」

紫穂「覚ってさ、、、、

彼女とかいた？」

ドキッ

覚「まあ、いたっちゃあいたけど、、、、
今はもう、この世には……」

紫穂「？ ふーん、そうなんだ」

柚菜「ちよつと紫穂ちゃんっ！」

真梨「紫穂の悪い癖よ？」

鮎「そうよ……まったく」

覚「いいって、気にすんなよ」

などいろいろな話をしながらも
帰って行くのであった。

覚「はあ、疲れた」
帰路についた。

しかしなんか1日、2日で
こんなに女友達
できるとはおもってもなかったな。

ま、前の俺を知らないから当然か。。。

いやいや、前を振り返ることはない。
大事なのは今だ。

俺は飯を食べ、風呂に入り、寢床に入り寝た。

9 / 3 (水) 『夢の中の君1』

夢の中で笑う君。

その君は誰なんだろう。

僕の名前を必死で呼ぶ君。

それは誰？

君は
-
-
-
-
-
-
-
-

目覚めてしまった。

あの夢は、なんだっただのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1372i/>

君といっしょに。

2010年11月5日22時41分発行